人文・自然・人間科学研究　No. 51, pp. 53-75　　March 2024

根源領域からの意味の生成メカニズム

── 鎌田モデルからみた井筒モデルと南方モデル ──

河　原　清　志

Mechanisms of Meaning Generation from the Root Region:

Izutsu Model and Minakata Model as Seen from Kamata Model

Kiyoshi KAWAHARA

要　旨

本稿は，鎌田東二の言語成層の三層構造モデルを土台にして，井筒俊彦の「東洋哲学の共時的構造化」と南方熊楠の「南方曼陀羅」のモデルとを対照しつつ両者の対応関係を模索しながら，人間にとって根源領域から言葉の意味がどのように生成されるかのプロセスないしメカニズムについて検討していくことを目的とする。本研究では，井筒の「共時的構造化」から見えてくる東洋哲学に通底する人間意識の階層構造（表層／深層構造）と根源にあるコトバを生み出すエネルギーの淵源について検討したうえで，南方曼陀羅における大日・心・物・事・名・印という意味生成プロセスを整理し，両者の比較検討を行った。その結果，鎌田モデルを土台にしたうえで，井筒の「共時的構造化」モデルと南方の曼陀羅モデルの間に，意味の生成メカニズムの共通性を見つけることができた。

キーワード：共時的構造化，深層意識・表層意識，根源的エネルギー，言語アラヤ識，南方曼陀羅

1. はじめに

本稿は，鎌田東二の言語成層の三層構造モデルを土台にして，井筒俊彦の「東洋哲学の共時的構造化」と南方熊楠の「南方曼陀羅」のモデルとを対照しつつ両者の対応関係を模索し，人間の意味生成のプロセスないしメカニズムを論じることを目的としている。井筒俊彦（1914～1993 年）は，著書『意識と本質』（井筒，1991）において，「意識」を基盤に「本質」を論じようと試み，東洋哲学の共時的構造化を行うことで東洋思想の根源に迫ろうとした。数多くの西洋哲学の諸理論家が思惟対象あるいは認識対象の「本質」を追究してきた。同様に東洋でも，「本質」「本性」ないしそれに類する概念が，言語の意味機能と人間意識の階層的構造とに聯関して，著しく重要な役割を果たしている

（井筒，1991，p. 7）。そして井筒は東洋における「本質」論の議論において言語の意味機能と人間意識の階層構造という 2 つの重要な側面を挙げて議論を進めている。

井筒（1991）は「本質」概念の問題性を手がかりにして，「東洋哲学の共時的構造化」の方法を用いながら東洋哲学の根源的思想の基盤の上に新しい哲学の創造を行なおうとした。具体的な東洋哲学の範疇には，仏教学，イスラーム神秘主義，ギリシア哲学，宋儒学，ユダヤカッバーラ，易学，老荘思想などが含まれている。井筒はこのように幅広い東洋哲学の視座のもと，多くの文化，宗教，心理学などの学問領域に通底する思想，人間の意識構造などを明らかにし，その構造の下にどのようにして私たちの使用する言葉が生まれてくるのかについてモデルを提唱している。小野（2023）が述べるように，井筒は表層意識と深層意識からなる心の構造を，人間に普遍的かつ共時的に共通するものと考え，東洋の諸思想を意識の表層と深層という構造の中に統合しつつ，人間の心を言語から解明しようとした（小野，2023，p. v）。

しかしながら，井筒のあげる東洋哲学の共時化モデルの中には，日本で同じような試みを行った思想家の考えを組み入れていない場合も見られる。そこで本稿では，まず，意識や言語の表層意識と深層意識を明確に三層構造で捉えた鎌田東二の言語成層モデルを導入する。そして鎌田モデルを土台にしながら，独自の世界観や存在論であるいわゆる「南方曼陀羅」を考案した，明治・大正・昭和期に活躍した南方熊楠を，井筒モデルと対照しつつ両者を対応させることで，井筒が論じた「言語アラヤ識」について多角的に検討してゆく試みを行う。井筒のモデルにおける言語の意味機能と人間意識の階層構造と，言語のダイナミックな生成プロセスを論じた南方のモデルとを比較することで新たに井筒の「東洋哲学の共時的構造化」の中に日本の思想，哲学を取り入れることができると考えられる。以上が本稿が目指している目的である。

以下では，第 2 章において井筒の「共時的構造化」から見えてくる東洋哲学に通底する人間意識の階層構造と，その根源にあるコトバを生み出すエネルギーの淵源について概観する。続く第 3 章では，南方の「南方曼陀羅」モデルを検討する。そして第 4 章では鎌田東二による「世界成層・言語成層」モデルを導入して，南方が提唱する諸概念を世界と言語の成層のうちに位置づける。第 5 章では，コミュニケーションにおける意味の生成メカニズムと南方モデルを検証する。そして第 6 章で井筒モデルと南方モデルの対応関係を論じ，最後の第 7 章で結論と今後の研究課題を述べる。

2. 井筒俊彦のモデル

2-1. 深層／表層構造の概要

まず，井筒の「哲学の共時的構造化」モデルを論じるうえで重要な井筒哲学の鍵概念

のひとつに，カタカナ書きの「コトバ」がある。井筒の言語観である「コトバ」がいかに世界を分節するかについて見てゆく。

⑴　深層から表層へ／無分節から分節へ

コトバは世界を有意味な単位に分節化する機能を指すことは一般言語学でも説かれていることである。分節とは，元来分節線が引かれていないカオス状の事態に，明確な線を引いて区画化し固定するという，意味の本源的機能を言う（井筒，2015, 第 10 巻，p. 414）。分節は本源的に言語意味的事態であり，無量無数の言語的分節単位それぞれの底に潜在する意味カルマの現象化志向性（自己顕現的志向性）である（斉藤, 2018, p. 33。カルマについては後述する）。この分節化には，①コトバが潜在的なレベル（深層）で分節化を担うもの，②自然言語が顕在的なレベル（表層）で分節化を担うものの二層がある。①は生物のレベルでも生じるもので，コトバという分節化機能は生命という存在秩序に由来する。①は（言語に先立って機能する）生物的第一次的存在分節，②はこれとは異質の存在分節である人間的第二次的分節であり，②は「文化」を分節する非自然的，文化的存在分節で，言語を仲介として生起する（斉藤，2018, pp. 34-39）。この井筒の考えを敷衍すると，完全な対応ではないが，（ここでは生物的次元を度外視し，人間にとっての言語について考えると）①「コトバ」は「言霊」[1]，②「自然言語」は通常の日常言語のことばであり，①第一次的分節はことばとして立ち現れようとする「根源的エネルギー」から「言霊」へ分節される局面，②第二次的分節は「言霊」が日常言語へと顕現し「意味」へ分節される局面と定位される。

⑵　深層／無分節の領野

次に，井筒は仏教の唯識哲学に注目し，「阿頼耶識（アラヤシキ）」論を自身の理論に取り込んだ。「コトバ」は阿頼耶識内に座すと措定し，「言語アラヤ識」という表現を作出した（但し，サンスクリット語の発音に即すならば，本来は「言語アーラヤ識」と表記すべきである）。そして唯識哲学が呈示する意識の三層構造モデルの最深層にこれを位置づける（井筒，2014, 第 8 巻，p. 175）。

㈠　感覚知覚と思惟・想像・感情・意欲などの場所としての表層（前五識・第六識）

㈡　一切の経験の実存的中心点としての自我意識からなる中間層（第七末那識）

㈢　近代心理学が無意識とか下意識とか呼ぶものに該当する深層（阿頼耶識）

この㈢はユング心理学が「元型」や「集団的無意識」と論じたものと符合し，この層では意識の最下層で機能する分節化（意味）への動向がうごめいている。これが「意味可能体」であり，井筒は「原基（プロト）意味形成素」「潜勢態のコトバ」などと呼び，唯識学派の言う「種子（しゅうじ）（bīja）」に相当するとしている。そして阿頼耶識は内的言語の意味「種子」

の場所であり，その痕跡が残るある種の溜り場である（井筒，2014, 第 6 巻，p. 177; 2014, 第 8 巻，p. 175）。また，「カルマ」とは言語化される以前の意味のことであり（斎藤，2018, p. 41。但し，サンスクリット語の “karman” にそのような意味は無く，これは井筒独特のかなり特徴的な解釈である），それを形象化（イマージュ化）したものが「種子」であり，この種子を意識されない形で蓄積しているのが言語アラヤ識であると井筒は位置づける。尤も，唯識哲学を厳密に捉えると，すべて種子は刹那滅，つまり瞬間瞬間に生滅し，その相続プロセスだけがそこにある，つまりは「カルマ痕跡」を残すという位置づけとなる。

ここで，言語アラヤ識の特性を確認しておく。言語アラヤ識は根源的に個人の心の限界を超出する。水平的には個人の体験の範囲を越えて拡がり，垂直的にはこれまですべての人が経験してきた生体験の総体に延びる集合的共同下意識領域である（井筒，2014, 第 8 巻，p. 177）。また井筒は言語アラヤ識という概念によって，ソシュール以来の言語学が言語（ラング）と呼びならわしている言語的記号の体系のそのまた底に，複雑な可能的意味連鎖の深層意識的空間を措定している（井筒，2014, 第 6 巻，p. 177）。したがって，イマージュ化された意味は，特定の言語（ラング，国語）や文化によって異なり，翻訳の不確定性が必然的に伴う（原理的には翻訳不可能，共約不可能な場合もあろう）。

この議論を敷衍すると，言語アラヤ識とは根源世界での言霊の実相を捉えたものであり，後述する基底世界および高次世界での「意味」が「種子」となって還元・痕跡化されるための蔵としての場を表していると言える。このプロセスには基底世界や高次世界で使用される個別言語を使用したことばが介在するため，個別言語の基底に存する集合的共同下意識領域が個別言語ごとに異なるため，コトバも個別言語ごとに異なった様相を呈することとなる（但し，筆者の社会言語学の知見からすると，言語 language は一枚岩ではなく，様々な変種 variant によって複層的に成り立っている。スピーチ・コミュニティごとに存する（地域差だけでなく様々な社会的要因や属性の差を反映した）方言 dialect や，個人間に差異のある個人語 idiolect も射程に入れて考えるならば，このコトバは話者が（単数または複数）属する言語のみならず，dialect や idiolect による違いと連動したコトバへと還元されていくことを付言する）。

⑶　表層から深層へ／分節から無分節へ

アーラヤ識は無分節なものが最初の分節を被る領域であった。では逆に，分節した世界からどのように無分節な世界へ向かうのか。それは，瞑想によって三昧（ざんまい）の境地に入ると，世界が流動的になり，個別的存在者どうしの確固とした境界が曖昧になって，すべてが渾然一体となる。さらに意識の深化が進むと，無を無として意識する意識もなく，

純粋な無，絶対的な無，意識のゼロ・ポイント，実在のゼロ・ポイントが顕われるとスーフィズムでは捉えている。これを老荘では「道」，易では「太極」，大乗仏教では「真如」「空」，禅では「無」，スーフィズムでは「ハック」と呼んでいる（井筒，2015，第 10 巻，pp. 493–494）。井筒はこの絶対無を「意識と実在＝存在のゼロ・ポイント」と呼び，東洋哲学の共時的構造化の要の概念にしている。では，どのようにしてゼロ・ポイントに到達するのか。

まず通常の分別の世界では，様々な物や事が互いに区別され，それ自体で存在しているように見える。これらの区別された物や事を華厳哲学では「事（じ）」という。そして物や事がもつ他とは異なる独立して存在する「それ自体」という性格を「自性（じしょう）」という。自性は人間の分別意識の所産にすぎない，いわば妄念であり，この自性の実在性が否定されれば，事物は互いに滲透し合う。経験的世界のあらゆる事物が相即渾融する事態を，井筒の解釈に従えば，華厳では「事事無礙」という。そして，あらゆる存在者の「空」化と共に起こる意識の「空」化，アーラヤ識が「空」化された状態を「無垢識」と呼び，華厳では「自性清浄心」という。このアーラヤ識は「無」と「存在」の中間に位置しており，中国で成立した『大乗起信論』では次のように位置づける。アーラヤ識はまず，「真如」の非現象態と現象態とのあいだにあり，両者を繋ぐ中間帯である。それは「真如」が非現象的・「無」的次元から，現象的・「有」的次元に転換し，事物事象の形に乱れ散ろうという境地を指す（井筒，2015，第 10 巻，p. 485）。アーラヤ識は「無」と「有＝存在」の中間的性質を持ち，識が生み出す虚妄にすぎない「存在」から世界の真相である「無」へと還る（往相（おうそう））だけでなく，「無」から「存在」がアーラヤ識を通して姿を現す（還相（げんそう））のであり，ここにおいて，アーラヤ識の相対する矛盾的性格，双面性，背反性が読み取れる（井筒，2015，第 10 巻，pp. 485–486）。この双面性に関し『大乗起信論』では，言語を超越して一切の有意味的分節を拒否する「離言（りごん）真如」と，言語に依拠して無限の意味分節を許容する「依言（いごん）真如」の 2 つを想定している（井筒，2015，第 10 巻，p. 503。）。

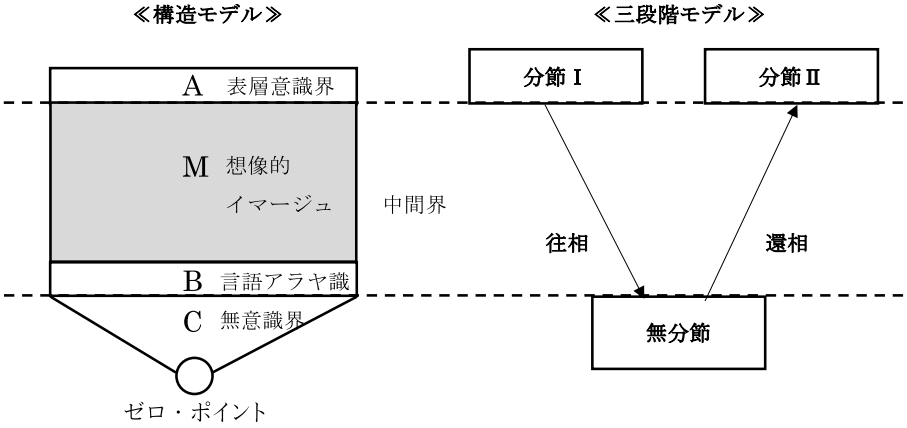
この議論を敷衍すると，前述⑵とは異なり，表層から深層への（ある種の瞑想，三昧による）ジャンプ（飛躍）が見られる。これは「双面性」と呼ばれる，Ⓐ自己を超える超越性と，Ⓑ自己の深淵部分への内在性という 2 つの相反的なベクトルである。Ⓐは「依言（いごん）真如」の力動，Ⓑは「離言（りごん）真如」の力動を表しており，Ⓐはことばだけでなく，自性清浄心（われわれの心は本来の姿において清浄である，つまり心性本浄であり，その心を自性清浄心という）へ向かうことばを徹底することで高次世界を垂直軸の上に突き抜けようとするプロセス，Ⓑはことばを離れて戯論寂滅の境地（正しくない無益な言論が滅せられて人間の迷いの働きが順次静められた境地）を徹底しようとする垂直軸の下に向かうプロセスである。いずれにしても，行きつく先は言語アラヤ識の領野である。

このプロセスの双面性が人間の表層意識と深層意識との絶えざる往復運動として見られるエネルギーの動きである。

2-2. 井筒俊彦「共時的構造化」モデル

では，井筒はこの表層から深層へ，深層から表層へという「三段階モデル」と，表層・深層の「構造モデル」をどのように定位したのだろうか（下掲図 1)。井筒は意識の深層領域を「コトバ」と「イマージュ」で語った。まず，「三段階モデル」では，禅師の語りは表層意識（分節Ⅰ）から始まり，意識を深めていって意識のゼロポイント（無分節）に至り，そこから再び表層意識（分別Ⅱ）に戻るという往相と還相のプロセスである。この「三段階モデル」では，分節と無分節の間の中間界が想定されていない一方，両者が同時に重なり分節即無分節という同時現成という二重の見を可能にする。他方，「構造モデル」では，井筒は往相プロセスを詳しく語っておらず，二重の見も語らない。したがってこれは修行者の視点を解き明かすモデルではなかった（西平，2021, pp. 130-133)。以下で，いかに分節の世界が構成され表層意識が構成されるかについて，「意識と存在の構造モデル」を詳しくみていこう。

図 1　意識と存在の構造モデル・三段階モデル



（井筒，1991, p. 214）　　（井筒，1991, p. 144　但し，上下は逆）

まず， A 領域は表層意識の層である。下に飛んで白丸は無分節状態，「意識と存在のゼロ・ポイント」，B 領域が言語アラヤ識である。この構造モデルは分別と無分別が断絶するのではなく，連続的相違（グラデーション）を認めている。そこで，C 領域が想定される。これは，白丸から B 領域への移行を示す領域である。B 領域から見れば，C 領域はアーラヤ識を超えてしまう。種子（意味エネルギー）が届かない。コトバから離れてしまう。「全体的に無意識であるが，B 領域に近付くにつれて次第に意識化への胎動を見せる」としている（井筒，2014, 第 6 巻，p. 222)。究極の無分節が自己分節へと

胎動を見せる微妙な領域である。（但し，このB領域については，慎重な検討を要しよう。）

そして井筒は「言語呪術」について言及し，「シャマニズムに限らず，ひろく一般に，呪文，祈禱，ダーラニー（陀羅尼），マントラ等の形で発音された言葉に，人が一種の霊力を想定する（あるいは，信仰する）ところ，どこにでも言語呪術は生きている」としている（井筒，2014，第6巻，p. 235）。発音されたコトバに促されて，「想像的イマージュ」が深層意識（M領域）に呼び起こされる。そのイマージュは圧倒的な力をもって人に迫ってくる。理性にとってはなんとも薄気味悪い神霊的なものである。言語呪術は，深層意識における「想像的イマージュ」を呼び出すが，それがそのまま表層意識における「経験的事物」とは考えない。第二次的に表層意識の認識機能に作用して，表層意識の世界像を「元型」イマージュ的に変貌させることはありうる。しかしそれは経験的事物そのものではない。深層意識のイマージュを，そのままただちに外界の存在現象と同一視してしまわないで，二重写しに観ることができる。そういう意味で，これも「二重の見」ではある。このように象徴的なイマージュに満ちた中間領域Mは，意味創造の創発の場である（西平，2021，pp. 135-154）。

この中間領域Mで起きているのは，「気づき」，つまり存在に対する新しい意味づけの生起である。気づきについては，西平のまとめを頼りに見てゆく（西平，2021，pp. 159-173）。

① 「気づき」は，ここでは，新しい客観的対象を客観的に発見することではない。むしろそれは，「意味」生成の根源的な場所である下意識領域（唯識のいわゆる「アーラヤ識」に，新しい「意味」結合的事態が生起することである。

② 「気づき」の意外性によって，アーラヤ識にひそむ無数の「意味種子」の流動的絡み合いに微妙な変化が起きる。

③ 「意味」機能磁場としての意識深層におけるこの変化が，次の「気づき」の機会に，新しい「意味」連鎖関連を，存在体験の現象的現場に喚起し結晶させていく。

④ 「気づき」は，日本的意識構造にとって，その都度その都度の新しい「意味」関連の創出であり，新しい存在自体の創造であったのである。

（井筒，2009，p. 435；西平，2021，pp. 168-170）

①「気づき」は新しい「意味」の結合であり，「アーラヤ識」＝B領域において生じる。アーラヤ識に貯蔵されていた意味エネルギーが「気づき」によって新たな結合を始める。②「意味種子」は流動的で表層意識に浮かび上がろうと待機している。その時，M領域

における「イマージュ」が変動を起こす。「気づき」が感覚イマージュに影響を与えれば知覚に変化が生じ，象徴イマージュに影響を与えれば外界とは関係なしに意識の深層（B 領域）から異なるイマージュが沸き起こってくる。③「気づき」という「現行」（現実の行為）が「種子」を熏習し，意識深層に変化をもたらす。そしてその「種子」が次の「現行」をもたらす（逆熏習）という循環である。これは存在体験の現象的現場という「場」が必須である。その場とは「主客を共に含む存在磁場」であって，主体も変化し，対象（客体）も変化するなかで，新しい存在を創造する。④「日本的意識構造」とは日本語という言語共同体と理解される。日本語に深く刻印された「意識構造」において，「気づき」のたびことに，その都度その都度，新たな「種子」の結合を生じさせ，新たな意味連関が創出し，存在自体が新たになってゆく。

言語や文化は社会制度として固定しているように見える表層次元の水面下に，隠れた深層構造をもっている。言語的意味は流動的かつ浮動的な未定形のまま，かつ消え，かつ現れる「意味可能体」である。相互に感応し合い絡まり合う無数の意味可能体が星雲のごとく漂いながら，表層的意味の表舞台に出ようとして相鬩ぎ合い，戯れ合う。形成途上で，絶えず変化しながら自分の結びつくべきシニフィアンを求めて八方に触手を伸ばしている。それが深層で起きていることである（井筒，1985, pp. 73, 259）。

以上，膨大な井筒理論のなかから，本稿に関連する箇所を取り出してきた。本章では無分節状態から言霊のようなエネルギーが噴出し，イマージュの攪拌によって新たな意味が創発し，ことばによってそれが日常領域のなかで顕現するプロセスを見てきた。無分節が自ら裂け目を起こし分節していってコトバによって存在が生み出され，それがことばとして顕現するという井筒の「意識と存在の構造論」からの発想は，私たちが日常で自分のことばにならない思いをことばにして表現し，人とコミュニケーションするなかでさらに別のことばを相互に誘発してゆくプロセスを表層的にも深層的にもよく言い表している。このプロセスこそが言語アラヤ識に刻まれた言語的な根源的エネルギーであり，それが揺れ動き意味可能体として弾け出すエネルギーが言語使用の場である。

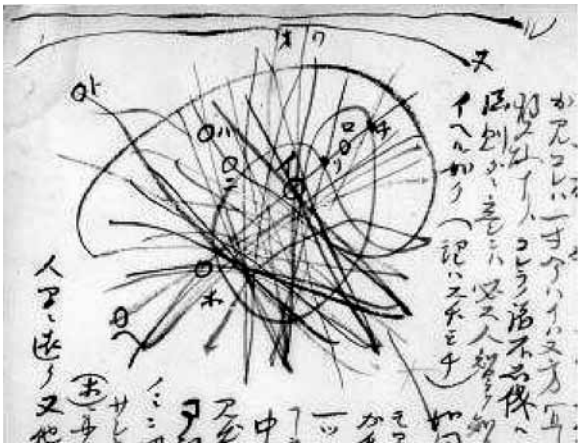
以上を踏まえて，次章では南方による「南方曼陀羅」モデルを紹介し，次々章では南方モデルが井筒の「共時的構造化」モデルにどのように定位できるかについて検討する。

3. 南方熊楠の「南方曼陀羅」

南方熊楠（1867〜1941 年）は，際限ない知的宇宙が膨張してゆく様を図像的に表現して「一切智曼陀羅」と鎌田が呼んだものを作成した（鎌田，2020, p. 8）。それには第一曼陀羅（図 2）と第二曼陀羅（図 3）という 2 つの「南方曼陀羅」がある（但し，このネイミングは南方本人ではなく，鶴見和子によってこの図を見せられた仏教学者中村

元による。唐澤，2015, p. 166)。それは南方による「世界」観，つまり「根源的な場」からどのように万物が生成され，さらに人間がどのように「現象」を捉え，その後いかにして認識した事柄が深層意識へと蓄積され，再び現出してくるのかという一連のプロセスを表したものである（唐澤，2017)。なお，曼陀羅とは密教の経典にもとづき，主尊を中心に諸仏諸尊の集会（しゅうえ）する楼閣を模式的に示した図像のことである（田中，2012, p. 185)。では，第一曼陀羅から見てみよう（1903 年 7 月 18 日付土宜法龍宛書簡の中に描かれた図)。

図 2　南方曼陀羅（第一曼陀羅）（南方熊楠顕彰館 HP より引用）



後に高野山真言宗管長となった土宜法龍との往復書簡のなかで，南方は図 2 を表しながら，世界を構成する 5 つの不思議について述べている。まず可知の領域である①事不思議（出来事／心界と物界とが交わる領域)，②物不思議（個物存在／物理学による研究領域)，③心不思議（心のはたらき／心理学によって考究可能な領域)，そしてこれら各領域の上位にあり，かろうじて人智によって知りうることができる④理不思議（メカニズム／予知・第六感の働く領域)，さらにそれらをすべて包み込む⑤大日如来の大不思議，の 5 つである（括弧内は鎌田，2020, p. 25 と唐澤，2017, p. 169)。認識世界の「不思議」を解明するために，物不思議の究明としての物理学，心不思議の究明としての心理学，事不思議の究明としての数学，理不思議の究明としての理学（自然科学)，そして学問的認識の根源に大日如来の「大不思議」があり，現象世界の事理の交錯の中に，この図 2 の㈠に当たる「萃点」というべき事理終結の交点がある。これを把握しこれからすべてを着想するのが，学問においても，生きる上でも肝心だと鎌田は解釈する（鎌田，2020, pp. 25-26)。また，⑤「大不思議」には内も外もなく，区別も対立もない。それは「完全」であると同時に「無」でもある。大日如来とは，真言密教の根本仏，宇宙の実相を仏格化した仏である。「萃点」は諸々の因果が交わる一点であり，この点を

基点にしてものごとを考えることが問題解決の最も近道だという（唐澤，2017, pp. 166-167, なお,「萃点」については，鶴見（2001）が詳しい)。

また，①事不思議の重要性も提唱している。南方は「心」と「物」の交わる「事」の領域こそ大事だという。自己が自己であるためには，非自己（他者）が必要で，この自他のあり方（関係・場）を考えることの重要性を唱えた。「事不思議」という「場」があってこそ，初めて自己（心）と他者（物）は存在する。自己（心）と他者（物）とが共存する場，つまり自他が各々明確な「区別」を持ち，正常な関係を持てる場＝「日常」を私たちは最初に知るべきだという（唐澤，2017, pp. 170-171)。

さらに，④理不思議の重要性も唱えている。これは予知・想像あるいは第六感の働く場であり，曖昧で混沌としており，分析的・客観的な知では捉えきれない領域である。既存の学問で分析的・量的・視覚的に捉えられるものではない。曖昧で混沌とした対象を全体に把捉するためには，その内部に深く直入することが必要不可欠である。そのためには，対象が自分とは元は一つであった片割れであると感じられるほどの強い関心を持ち，そして極度の集中力を持って対象内部に入り込み，全体を包括的に捕えることが肝心だという。この「理不思議」にこそ「一切の分かり」が隠れており，私たち人間にはこのような領域を知る能力があるという（唐澤，2017, pp. 173-174)。

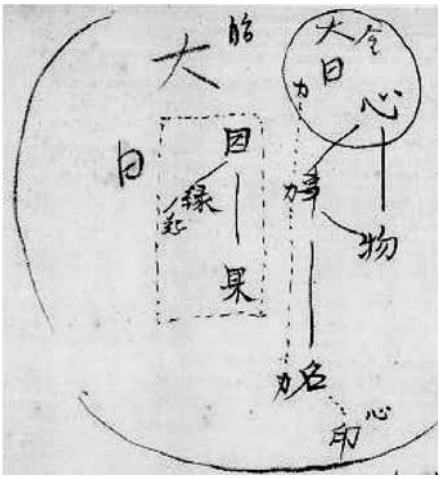
最後に，⑤大日如来の大不思議を説いている。これは,「生命そのもの」ないし「根源的な場所」である。自己も他者も，生も死も，すべてを包蔵する「自他が完全に融合した場」である。南方は「理不思議」において「大不思議」から流れてくる既存の言葉では表し得ない何かを感じ，掴み取っていたに違いないという。全てが溶け合う「大日（大不思議)」という「根源的な場」においては，日常的時間は存在しない。私たちが至極当たり前だと考えている事柄＝常識に疑問を投げかけ，視覚化不可能な「生命そのもの（根源的な場)」を思索するための重要な手がかりになるのがこの「大不思議」である（唐澤，2017, pp. 176-178)。

次に，第二曼陀羅を見てみよう（1903 年 8 月 8 日付土宜法龍宛書簡の中に描かれた図)。

南方は同日の書簡に以下のように記している。

> 四曼陀羅のうち，胎蔵界大日中に金剛大日あり。その一部心が大日滅心（金剛大日中，心を去りし部分）の作用により物を生ず。物心相反応動作して事を生ず。事また力の応作によりて名として伝わる。さて力の応作が心物，心事，物名，名事，心物心，心名物，……心名物事，事物，心名，……事物心 名事，物心事，事物……心名物事事事事心名，心名名名物事事名物心というあんばいに，いろいろの順序で心物名事の四つを組織するなり。［中略］真言の名と印は物の名にあらずして，事

図 3　南方曼陀羅（第二曼陀羅）（南方熊楠顕彰館 HP より引用）



が絶えながら（事は物と心とに異なり，止めば断ゆるものなり），胎蔵大日中に名としてのこるなり。これを心に映して生ずるが印なり。故に今日西洋の科学哲学等にて何とも解釈のしようなき宗旨（クリード），言語（ランゲージ），習慣（ハビット），遺伝（ヘレジチー），伝説（トラジション）等は，真言でこれを実在と証する，すなわち名なり。（1903 年 8 月 8 日付土宜法龍宛書簡）（傍点，フリガナ―原文ママ）（南方，1991，pp. 338-339）

これについて，鎌田はつぎのように整理している。

① 真言密教の両界（両部ともいう）曼陀羅に描かれた胎蔵界大日如来（理）の曼陀羅の中に金剛界の大日如来（智）がある。

② その金剛界大日如来の一部の「心」の作用によって「物」が生まれてくる。

③ その物と心が相互に作動し合って現象ないし出来事としての「事」が生じてくる。

④ その「事」が金剛界大日如来の「力」と智の作用によって「名」を表す。

⑤ こうした「力」のはたらきが，「心物，心事，物名，名事，心物心，心名物，……」を生む。

⑥ これらのはたらきが「心」に映し出されて感受としての「印」（印象）が生じてくる。

［中略］すべての源は，母胎としての胎蔵界（生）大日如来である。だが，その胎蔵界（生）大日如来から金剛界大日如来が顕われ，その「一部心」から「物」や「事」が生じ，それに「名」が付けられ，「印」を生む。こうして，胎蔵界大日如来から発した理路と智路との認識課程が構造化される。［中略］それはどこ

までも横一面に延びてゆき極まりがない，無始無終の果てなき連鎖の中にある。（鎌田，2020，pp. 21-22）

南方は，第一曼陀羅に「名」と「印」を包摂して曼陀羅の完成形と考えていたのであろう。金剛界が胎蔵生に包含される関係性もこの第二曼陀羅で開陳している。「名」とは，言葉にできないような記号的なもの，「印」とは「名」が数多く集まった結果，より具体的に映像化・イメージ化されたものである。「名」が具体化され心に描かれ，そして多くの人々に共有されるに至ったものが「印」だという（唐澤，2017，pp. 192-194）。

金剛界すら含むすべてが胎蔵生から生まれ，金剛界の一部に「大日滅心」の作用が働き，亀裂が生じ，「心」と同時に「物」が生じ，この「力」こそが，すべてを包摂する根源的な場を分裂させる否定力であり，すべての存在とその関係網のダイナミックなエネルギーであると言える。

以上の南方曼陀羅を敷衍すると，次のようになる。人智では不可知な⑤大日如来の大不思議がすべての根源であり，「言霊」と「原意味」（ことばにならない意味，意味づけ前の意味）が混沌としている領域である。そこに内部亀裂のエネルギー（力）が炸裂し，予知や第六感で感得できる④理不思議では，「前意味」（ことばにならない「原意味」が言語化しようとする躍動が造形化する一歩手前の段階，言語化し実際の具体的な発話がなされる，ことばにならない思いのようなもの）を担う様々なエネルギーがうごめく。この潜勢態が具体的な場で顕現するのが①事不思議であり，日常世界において日常言語で分別されながら②物を把握しつつ，③心が作用する。ここで具体的な「意味」が具現化すると言える。高次領域にあっては，②物不思議や③心不思議は特に物理学や心理学の対象となる科学領域であり，また宗教言語や詩的言語によって物や心が事不思議の領野で自己（心）と他者（物）が交わり共存する重要な場となる。

但し，南方は超越化・内在化を内包する「超意味」（日常の意味を超越させて高次の意味へと止揚する作用）・「脱意味」（日常の意味を徹底して（宗教的な意味で）否定することで意味を無に帰す作用）のエネルギーのダイナミックなプロセスについては正面から取り上げていないようではある（但し，中沢は「名」はアーラヤ識にエクリチュールとして痕跡を残すとしている。中沢，1991，p. 38）。しかしながら，金剛界大日という「場」において，「心」という解釈が「物」という対象物を把捉し，「事」という記号を当てる。その記号は単に言語だけではなく，現象や出来事，行動や発話などを含む複合体である。そして「名」とは，さらに心と物とが交わり事が生じ，その円環が反復されることで蓄積される集団やコミュニティのレベルでの（恐らくステレオタイプ的な）表象であり（更新された解釈），それが具体的に映像化・イメージ化されたものが「印」である（更新された記号）。

これら南方の概念が，人間の言語の表層・深層構造とどのような対応関係にあるかを見るために，鎌田東二による「世界成層・言語成層」モデルを次章で導入する。

4. 鎌田東二による「世界成層・言語成層」モデルと南方モデル・井筒モデルとの融合

4-1. 鎌田東二のモデル

本章では，南方が提唱する諸概念が，言語成層においてどのような布置になっているかをわかりやすくするために，宗教学者である鎌田東二による「世界成層・言語成層」のモデルを導入する。鎌田（2017）は言霊研究の一環として，世界が言語とどう関わっているのかの原理論的問題を論じている。以下，それを約言する（鎌田，2017, pp. 280–285）。人間が世界や他者と関わる特有のあり方は言語的関係にある。そして世界が人間にとってどのように存立しているかが世界成層の問題である。これと言語成層の関係を見てゆくと次のようになる。

まず，世界成層には日常世界がある。E. フッサールや P. バーガー，T. ルックマンのいう「学以前の生活」「生活世界」，A. シュッツのいう「多元的宇宙」「社会的世界」，相互主観的に構成された「我々の世界」，「至上の現実」，基底的世界と多様な副次的世界からなる「多元的現実」，すでに目の前にある所与の世界，などとして描かれ，成型された世界の自明性を構成論的に捉え，コスモス化されノモス化される世界のあり方を論じている。

次に，根源世界は，日常世界の下層にあり，日常世界が構成される以前の超日常的でカオスに満ちた原初的な世界である。これは，ポエジー，混沌，夢，狂気などの融合した根源的イメージの世界である。名辞以前の世界で神秘的でもある。そして日常世界はこの根源的場から発生するという考え方が背後にある。特に J. クリステヴァは，定立的主体以前の無意識の記号生成の発生論的プロセスを視野に収めて，世界が成立してくるダイナミズムをより広い地平で問題にしている[(2)]。

そして，根源的場→日常世界（一次世界）→詩的世界・宗教世界・科学世界（二次世界）という 3 層からなる世界成層が考えられる。二次世界は一次世界の自明性・固定性・慣習性を揺さぶり，分解する経験をさせ，その裂け目から根源世界があることを垣間見る。と同時に，高度に概念化・象徴化された経験を言語化して構成する。日常を基底にしつつも，そこから独立した固有の論理と存在様式をもった自律的世界を構成するのが，詩的世界・宗教世界・科学世界である。

このような世界成層を想定することと呼応して，その世界に対応する言語活動の層的構造も同様に考えられる。概略すると，言語は下から「根源語」「基底言語」「高次言語」

の三層構造をなし，「根源語」は根源的イメージ，「基底言語」は日常言語，「高次言語」は詩的言語・宗教言語・科学言語からなっており，詩的言語に近づくほど多義性・含意性が強く，科学言語に近づくほど一義性・明示性が強くなる。

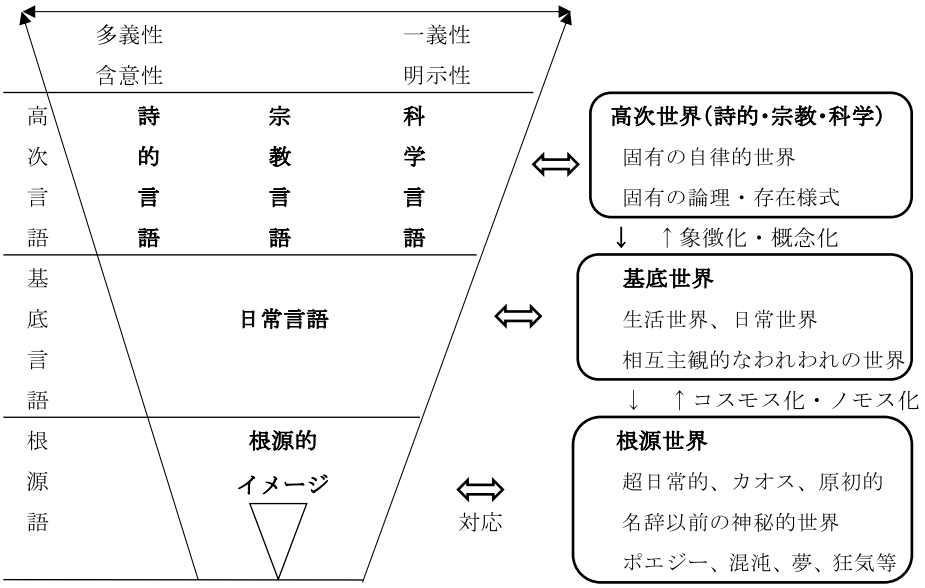
まず，日常言語と詩的言語の違いについて，L. P. ヤクビンスキーは，日常言語は言語表象（音，形態的な部分等）が独立した価値を持たず，伝達を目的としている。しかし，伝達目的が後退し，言語表象自体が自立した価値を獲得する別の言語体系が考えられ，それが詩的言語であるという（ヤコブソン, 1995, p. 226）。日常言語は言語場や発話場の制約に依存した形で伝達を目的とするが，詩的言語は言語場から自立してメッセージそのものへの指向を持ち，テクストそれ自体の表象世界を構成する。

つぎに，詩的言語と科学言語の違いについて，詩的言語は含意性（connotation）に富み，これを己れの能記（signifiant）とする言語，つまり能記のうちにさらに能記と所記（signifié）が内含される言語である。それに対して科学言語は詩的言語と同様，言語場からの制約から独立しており，明示性（denotation）を己れの所記とし，所記のうちに二重に能記と所記とを含む言語である。さらに，詩的言語の特徴は，音表象や多義性を利用し，もうひとつの現実を垣間見せ，想像力の噴出した世界を描く言語である。それに対して科学言語の特徴は，指示対象性，線的構造を持ち，対象世界の量的記述に奉仕する言語で（数学が典型），厳密な定義により一義性を確定し，理性によって概念や理論を定立して，対象となる実在世界の構造を客観的に記述する言語である。

さらに，宗教言語の特徴について，第一に，日常言語と同様，言語場の制約を受ける。したがって，科学言語・詩的言語は主に意味論・統辞論レベルの問題領域であるのに対し，宗教言語は語用論レベルが最重要になる。第二に，科学言語・詩的言語は言語主体を捨象してもテクストとして自立しうるが，宗教言語は本質的に語る主体を抜きにしては考えられない。語り手と受け手との相互交流のなかでメッセージ内容が確定するため，その過程で変容しうる。したがって言語場の制約が強い。第三に，宗教言語は根源的イメージが歴史的なプロセスで象徴化された形態であり，宗教性の高い概念の根源的イメージを強力に含意していて，多様な解釈を生み出す。そして常に再解釈可能性に開かれており，既存の世界を再解釈・再発見する再生機能を秘め持っている。第四に，宗教言語は根源語を秘義的中核に持ち，その周囲に儀礼言語，教説言語，神学言語などがあり，その外周に日常言語があるという同心円的構造を有している。宗教言語は，含意性の点で詩的言語と共通し，明示性の点で科学言語と共通し，さらに言語場の制約の点で日常言語と共通する。他方，独自性としては，言語場を改変し，場の関係性を再構築する創造的働きがあり，変換＝再生機能を持つ。

以上をまとめると，図 4 となる。世界成層＝｛高次世界・基底世界・根源世界｝と言語成層＝｛高次言語・基底言語・根源語｝とが対応関係を成している。

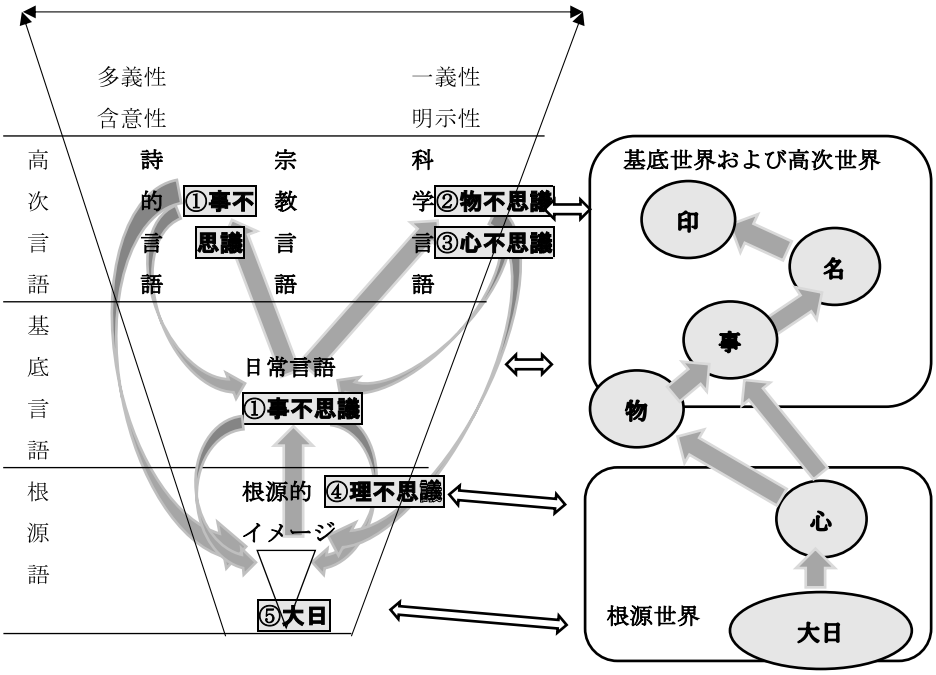
図 4　世界成層と言語成層（鎌田，2017, pp. 280–285 を基に作成）



4-2. 鎌田モデルと南方モデルとの融合

そして，この図 4 における言語成層の三層構造と南方の「大日・心・物・事・名・印」という意味生成プロセスを対応させると，図 5 となる。

図 5　南方曼陀羅と言語成層



特筆すべきは，第二曼陀羅において，「因果」（原因と結果のリニアな関係）だけでなく，「縁起」（単純なリニアな関係に還元できない因と果の在り方）も南方が含めている点である。この点を含めて，南方の考察について唐澤（2017）を中心にまとめよう。

南方によると当時の自然科学は，科学的探究を直線的な因果関係とそこに生じた一つの単純な命題である「事」のみに還元しているために，行き詰まりが起きていたという。現在の自然科学は，原因と結果がリニアに結びついているのではなく，偶然が入り込む余地を認めた上で，ある原因に対する結果を確率で計算し，その因果関係が有意かどうかを判断する方法が多くの分野でとられている。例えば，南方とほぼ同時代の科学哲学者の C. S. パース（1839〜1914 年）は，1892 年に「必然性原理再考」“The Doctrine of Necessity Examined” を発表し，リニアな因果関係のみに還元されない偶然性について論じている。偶然的な「縁」が学問全体において重要な要素になると，パースも南方もこの時代に気づいていた。

西欧における自然科学が，原因＝結果という直線的因果律を土台に発展し，ロゴス的な知性によって対象を把捉していた。しかし「縁」は偶然性を内包する。南方は「縁」を直線的因果関係の上位に据え，ロゴスを超えた縁起法則を想定した。「縁」は非因果的連関作用であり，想定外の発見や発明を誘引する。南方は縁起を科学だけでなく一般の意味作用も射程にいれて南方曼陀羅を提唱したものと思われる。

たとえば，我々の生きている「世界」は複雑で，「事」が重複し「名」へと変化し得る，つまり安易な慣習化や常識化がなされることを忘れてしまいがちだ。そもそも「真実の物」＝「物自体」を我々人間が知ることはできない。それはあくまで「印」というバイアスがかかった「物」である。「物」を知ろうとする場合，その「物」のイメージは，既に人間の先入観によって形成されてしまっており，フィルター（ステレオタイプ）を通した「物」しか知ることができないのである。このフィルターこそが，「名」である。「名」は，記号の連鎖で無意識に獲得した習慣的なものである。だからこそ「名」の実態を知ることでこそ，「物」への新たな見方が可能になる。常識化された慣習，正義とされた思考の枠組を相対化して見ることができるようになる。

縁起の関係が成り立つ場では，個物の「自性」（本質）は無化する。一は他によって，他は一によって成り立っており，各々だけでは成り立たない。個物は単独で独立して存立するのではなく，重なり合いと錯綜する関係においてこそ成り立つ。したがって，この重なり合いの関係網のなかでは個のみが強調されるような「自性」は無化されている。個物の「自性」が無化された場では「全体の中に個がある」という通常の考えさえぐらつく。個は全体によって成り立ち，また全体は個によって成り立っている。縁起とはこういう関係性であり，それが成り立つ場こそ「自性」が無化された「空」の場，まさに大日如来そのものである。

南方は，分析的，論理的な知だけでは捉えきれない「名」と「印」そして「縁」という言葉を用いて，偶然性を内包した物事のあり方，記号の無限更新的プロセスを論じた。そしてロゴス的な知を乗り越える新しい知の在り方を，仏教や密教の言葉を参考にしながら見出そうと試みていた。

4-3. 鎌田モデルと井筒モデルとの融合

図1で示したように井筒の「意識と存在の構造モデル」は，深層領域から根源的エネルギーが漲り，C領域（無意識界），B領域（言語アラヤ識），M領域（想像的イマージュ）の領域での意味の生成プロセスを経て表層領域においてコトバが現象するメカニズムを説明している。これは図4で示した鎌田モデルにおける「根源語」の領域から「基底言語」へ向かう領域について詳しく説明しているという対応関係が見られる。鎌田モデルにおける「根源世界」，つまり超日常的，カオス的，原初的な名辞以前の神秘的世界，ポエジー，混沌，夢，狂気などの世界は，井筒が描く深層世界と対応し，想像的イマージュや言語アラヤ識の中間界や無意識界において現象するものと思われる。したがって，本稿では鎌田モデルの土台に井筒モデルをあてはめて，両者を融合して表層意識・深層意識を捉えてみたい。

5. コミュニケーションにおける意味の生成メカニズムと南方モデル

ここで，鎌田（2017）の言語観を参照してみよう。鎌田は「言語とは，エネルギーの変換装置であり，そこに『言霊』のはたらきがあるといえる」（鎌田，2017, p. 55）として，言語学とは人間学であり，さらには霊学にまで突き進むものであるという（p. 52）。そして，「言霊とは，呼吸し，生命をもって成長する言葉ないし言語活動であり，成長する時間性を内含している。言葉は，霊であり，社会身体の血であり，母の乳なのである」という（p. 334）。したがって，言霊論は，言葉ないし言語行為と霊魂ないし霊性が切り離せない存在論的結節であると説く。また，生命的な生成する身体性を持つ言霊は，現実に対して，意識や物質に対して，創造的な力を持って働きかけると説く。したがって，言霊のレベルでは，言と事，言葉と出来事とが一致し，言が事，霊が物を呼び出す力となる。名辞と物，能記と所記との自然的同一性がごく自然に導出される。言霊は人類の「初発」にのみ起源があるのではなく，根源的な「響き」の体験によって生起する瞬間にも開示され，繰り返される。まさにひとつひとつの言語的発声の発生現場で繰り広げられる根源的働きである（pp. 334-335）。

言語には物質的なレベルから，生命宇宙的なレベル，社会的なレベル，霊的なレベルまで多次元的な位層があり，そうした多層的次元が互いに流動的に浸透し合い，言語の

内部生命に人間が深く関わるときに，創造的な産出力が各位層を貫いてダイナミックな力動をもたらす。言葉と物と意識とが響き合い浸透し合う（p. 54）。

ここにおいて，言語成層と意味の生成プロセスがより鮮明に理解される。言語成層において，「言霊」を根源として，根源語→基底言語→高次言語という多層構造の各層において，根底には「言霊」のエネルギーが生きていると言えるし，まさにあらゆる人間の言語成層において遍満しているとも言える。その言葉のエネルギーの流れが，意味の無限更新的変容のダイナミズムと符合する。したがって，鎌田は「言霊」を論じながら，遍満する「言霊」のエネルギーについて語っているのである。

たとえば，癌に罹ってしまったこと。震災に遭ったこと。火山噴火に遭ったこと。パワハラに巻き込まれたこと。愛する人の死に直面したこと。枚挙に暇がないほど人は様々な経験をする。それらの生の体験に元々言葉はない。無分節・無分別の状態である。まさに西田幾多郎のいう純粋経験である（詳細は別稿に譲る）。この経験が強烈に言語アラヤ識に熏習され，深く刻み込まれる。そして，沸々と湧き上がる熱い思いが内面で込み上げる（原意味）。そのどうしようもない遣る瀬無さを抱握するエネルギーに言葉を付与する（前意味から意味へ）。辛い。苦しい。悲しい。どうしようもない。やりきれない。いや，頑張ろう。闘おう。正面から向き合いたい。いや，忘れたい。執着から離れたい。前を向いて生きよう。さまざまに生起する感情に，言葉を貼り付ける。根源語から基底言語が誕生する逆熏習の刹那である。南方の言葉を借りれば，大きな「大日」という人間世界を包括する宇宙の意味場において，「心」の作用によって「物」に接したときに「事」が起こる。あるいは，病気や震災などの出来事や経験という「物」が経ち現れたときに原意味という「心」が顕現する。そしてその顕現したエネルギーが言動というアクションを起こす。これが「事」である。被災住宅に住む，新たな津波防止柵を作る，復興活動に尽力する，被災者を弔うなど，このアクションが別の人のアクションを連鎖的に引き込み合い，一連の「事」が生起する。それがイメージとしての「名」を生み，そのものに「印」というシニフィアン＝シニフィエを形成することとなる。そして南方は，発話される言語の奥に潜むより本質的なものとしての「言語」を「名」と考えていた（唐澤，2017）。つまり，「名」とは間主体的に共有される潜勢態としての言語，つまり言霊であり，これこそが場に顕現する根源的エネルギーであるといえよう。それにイメージの物質性を付与した，具体的な象徴をあらわしたものが「印」である。「物」と「心」は，「事」によって現れ，「名」を介して「印」を生じさせる。そして，南方のいう「名」とは，根源的エネルギーそのものを示唆する概念だったことが推察される。

6. 井筒モデルと南方モデルの対応関係

以上，井筒の「共時的構造化」モデルと南方の「南方曼陀羅」における，ことばと意味の生成プロセスに関するそれぞれのモデルの整理を行ってきた。そして，ここでは鎌田モデルを土台にしながら，井筒モデルと南方モデルの対応関係について見てゆく。以下では，主に2つの観点から見てみたい。

Ⅰ．ことばの発生は根源世界，無意識・深層意識領域から生じる

ひとつめの共通点は，両者のモデルにおいて私たちが日常的に使用することばは，私たちがその存在を意識レベルでは捉えることが出来ないような根源世界，あるいは無意識・深層領域から生じ，展開するというモデルを展開している点である。

井筒のゼロ・ポイント，南方の大日がそれぞれのモデルで対応していることが分かる。井筒の「意識と存在の構造モデル」におけるゼロ・ポイントは無分節状態であり，そこには厳密にはコトバすらも存在していない。しかし，そこにはC領域（無意識領域）を経てB領域の言語アラヤ識へと向かう根源的なエネルギーの力動の可能性が含まれている。この井筒モデルは連続的相違（グラデーション）を前提としており，上部に存在するより表層的な領域はその下に存在しているより深層の領域から何らかの影響を受け展開していると位置づけられている。したがって，C領域における無意識の働きもそのさらに深層部に想定されるゼロ・ポイントの影響を受けていると言える。そこで，井筒のモデルにおけるゼロ・ポイントも厳密には無分節状態でありながら，そこには何もないわけではなく，上部の領域に影響を与える何らかの可能性・潜在性を秘めている。

他方，南方モデルにおいては，根源領域において総てを包摂する大日が想定され，そのうえで根源領域ないし深層領域において「心」が働く。それが表層領域である日常世界（基底世界）や高次世界において「心」の作用によって「物」が対象化され，その物と心が相互に作動し合って現象ないし出来事としての「事」が生じる。その「事」が金剛界大日如来の「力」と智の作用によって「名」を生じさせる。これらのはたらきが「心」に映し出されて感受としての「印」（印象）が生じる。このプロセスは無始無終の果てなき連鎖の中にあり，延々と続いていく。

以上のような総括を通じて2つのモデルを対応させると，ゼロ・ポイントと考えられるすべての源，母胎としての胎蔵界大日如来から発した根源的エネルギー（鎌田モデルでいうと根源世界にある逆三角形）は，言語アラヤ識に蓄積された種子が逆熏習される「力」となる。そして「心」の作用により原意味が前意味となり，対象たる「物」に対する意味を生じさせ，それが現象ないし出来事として「事」を生じさせるように作用す

る。その内部では井筒モデルにおけるイマージュの中間領域で創造・再創造の意味作用が働き，表層意識の領域，つまり基底世界や高次世界において「事」を現象させる。それがコトバという分節記号である「名」となり，その名をめぐって解釈という意味づけ作用を促す。この作用がコトバの意味として種子に熏習され，「印」となって個人の言語アラヤ識に蓄積されるとともに，コミュニケーションにより「印」が共有され，共同体の各メンバーの言語アラヤ識にも蓄積されることになる。絶えず根源的エネルギーの「力」が及んでそのプロセスが無限に更新されていくことで，このコトバの意味が絶えず改変されながら，「印」も更新されていくことになる。以上より，深層領域から根源的エネルギーが漲り，C 領域（無意識界），B 領域（言語アラヤ識），M 領域（想像的イマージュ）の領域での意味の生成プロセスを経て表層領域においてコトバが現象する井筒モデルと，「大日・心・物・事・名・印」という意味とコトバの生成プロセスの南方モデルとは，厳密な形ではないにしてもある程度対応していると言えよう。さらに，両モデルともゼロ・ポイント，大日といった領域を起点に生じるコトバが常に生成，変化していく様子を描いている。単に深層意識から表層意識へと言葉が展開し，コトバによる意味分節が行われていく過程だけではなく，表層意識から深層意識へ（分節から無分節へ）とコトバの意味が刻み込まれ，蓄積されていくことがわかる。深層意識の意味の無分節の世界と，表層意識の意味の分節の世界との円環運動を絶えず行っているのである。その原動力が，コトバや意味を絶えず生み出す根源的エネルギーであるといえる。

Ⅱ．ことばの発生と意識の起こりは表裏一体である

ふたつめの共通点は，両モデル共にことばの生成と私たち人間の意識や意味の生起とが密接な関わりを持っている点である。井筒モデルでは仏教の唯識哲学に注目し，「阿頼耶識」論をモデルに取り入れ，コトバが言語アラヤ識における種子から生じると位置づけている。そして種子から生じるコトバは井筒モデルの表層領域へと展開するにつれ意味分節が進み，私たちが意識で捉えることのできることばへと展開する。深層意識内で生じたコトバは，そのレベルでは私たちの意識で捉えられないが，表層へと展開するにつれ日常的なことばに変化をしていくとともに，同時にそれを私たち人間の意識で捉えることができるようになる。つまり，コトバの生成，変化は同時に人間の意識や意味の生起とも密接に関わっていることがわかる。

他方，南方モデルにおいても，根源領域の大日や心は明瞭に意識化できるものではないが，物という対象，事という（ことばや行動などの）現象，名による共有化，そして印という印象づけのプロセスは，無意識化から意識化のプロセスであり，そして強化・共有化によるさらなる意味の無意識への刻印と蓄積化のプロセス，そしてこの両者の円環プロセスは，井筒モデルと同様，コトバの生成，変化が同時に人間の意識や意味の生

起とも密接に関わっているといえる。

井筒と南方の違いとして，井筒は個人の内部でのプロセスに焦点を当てている。それに対して，南方は個人の内部プロセスのほかに，名という記号を複数の人が共有することで共通の意味を印という形で深層意識に刻み込むプロセスをも扱っており，南方はコミュニケーション論を内包している点で，両者は異なると言える。そしていずれも，鎌田の三層構造のモデルに組み入れることができるモデルである。

7. おわりに

まず第2章において井筒の「東洋哲学の共時的構造化」を通して人間意識の階層構造（表層／深層構造）と根源にあるコトバ，そしてそれを生み出すエネルギーの淵源について整理した。そして第3章では，南方の「南方曼陀羅」モデルを検討した。第4章では鎌田東二による「世界成層・言語成層」モデルを導入して，南方が提唱する諸概念を世界と言語の成層のうちに位置づけた。第5章では，コミュニケーションにおける意味の生成メカニズムと南方モデルを検証し，第6章で井筒モデルと南方モデルの対応関係を論じた。その結果，井筒の「共時的構造化」モデルと南方の「南方曼陀羅」モデルの間に，①ことばの発生は無意識，深層意識領域から発し，表層意識へ向かっていく段階を経てことばが生成していること，②ことばの発生と意識の起こりは一体であり，意味はことばが生成されるのに連動して生起するという共通性を見た。本研究は井筒のあげる東洋哲学の共時的構造化モデルの中に南方のモデルとの共通点を見いだし，東洋哲学の共時的構造化モデルの裾を広げ，井筒モデルの可能性を高め，日本における言語哲学，コミュニケーション哲学，あるいは哲学的な意味論などの研究の新たな可能性を提供するきっかけになったと考えられる。

今後の課題としては，井筒の「共時的構造化」モデルの再検討や南方の曼陀羅モデルの実証的な検証の必要性が挙げられる。まず，井筒のモデル自体に関して多くの分析，検討を加える必要のある箇所が存在している。仏教学者である竹村牧男が指摘するように，仏教の唯識説が井筒の想定するモデルを想定しているかについては詳細な検討を要する（竹村，2021）。例えば，井筒のモデルで想定されているような言語アラヤ識から表層意識界やイマージュの世界へとコトバが生み出されるのかという点などについては検討が必要になるであろう。本来，仏教の唯識説では名言種子（みょうごんしゅうじ）のほとんどは意味に転成したりすることはなく，言語を司る働きは第六識に限られていると考えられている（竹村, 2021, p. 380）。あるいは，同じく竹村による井筒の空海理解への批判（竹村, 2021, pp. 341-377），唯識理解への批判（竹村，2021，pp. 377–381）を十分に踏まえる必要がある。その要点は，「存在はコトバである」と提唱する井筒は世俗言語と聖なる言語を

地続きで考えており，凡夫の妄語（人間の経験世界の言葉）と仏の真語（異次元の言葉）との区別を無視している点である。実は，この点は南方熊楠についても当てはまる。熊楠は大日滅心や縁起という仏教や密教の独特の概念を援用して言語による意味創発エネルギーのプロセスについて論じたが，結局，井筒も熊楠もその論法は，無意識の領野の存在喚起エネルギーが異次元の絶対的一者に投影したものに過ぎず，そもそも仏教思想とは相容れないものである。また，もう少し大きな視点に立つと，仏教自体が東洋思想全体の中で異端であり（竹村, 2021, pp. 376-377），これらを果たして東洋哲学の共時的構造化の理論としてモデルに組み入れてよいかという本質的な問題も指摘できよう。

このように，井筒のモデル自体今後さらに仏教の唯識説をはじめ，深層心理学における意識，個人的無意識，集合的無意識のモデルなど様々な分野領域からの検討が必要になる。他方，南方の論法も，現代の学術的な視点から真にその正当性が妥当するのかの検証を，実例とともに行っていく必要がある。とはいうものの，井筒と南方のオリジナリティーの高いモデルにより，日本という東洋の地平での新たな視座から，言語コミュニケーション哲学や意味論を展開する可能性に本稿が貢献できていれば幸いである。

《注》

（1） 島田（1995）は，言霊とは言葉の最小単位であると同時に心の最小要素でもあるもの，心であると同時に言葉であり，言葉であって心であるもの，即ち言霊であると説明をしている（島田，1995, p. 15）。

（2） J. クリステヴァは，記号生成の源泉である欲動場が，母の身体としての想像界における原記号作用から，父制制度・言語秩序としての象徴界における象徴作用へと硬直化していく記号生成のメカニズム，意味形成性のプロセスとセミオティックへの還入の動態を解明している（鎌田，2017, pp. 281–282）。

引用文献

井筒俊彦（1985）『意味の深みへ　東洋哲学の水位』岩波書店

井筒俊彦（1991）『意識と本質　精神的東洋を索めて』岩波書店

井筒俊彦（2009）『読むと書く　井筒俊彦エッセイ集』慶應義塾大学出版会

井筒俊彦（2014）『意識と本質　1980 年–1981 年（井筒俊彦全集 第六巻）』慶應義塾大学出版会

井筒俊彦（2014）『意味の深みへ　1983 年–1985 年（井筒俊彦全集 第八巻）』慶應義塾大学出版会

井筒俊彦（2015）『意識の形而上学　1987 年–1993 年（井筒俊彦全集 第十巻）』慶應義塾大学出版会

ヤコブソン，R.，水野忠夫（編）（1995）『ロシア・フォルマリズム文学論集 1』せりか書房

鎌田東二（2017）『言霊の思想』青土社

鎌田東二（2020）『南方熊楠と宮沢賢治 ── 日本的スピリチュアリティの系譜』平凡社

唐澤太輔（2015）『南方熊楠 ── 日本人の可能性の極限』中央公論新社

唐澤太輔（2017）「南方熊楠による『世界認識構造図』の解読と考察 ──『名』と『印』をめぐる言説を中心に ──」『頸城野郷土資料室学術研究部研究紀要』第 2 号（8), 1–22.

南方熊楠（著），中沢新一（編）（1991）『南方熊楠コレクション　南方マンダラ』河出書房新社
中沢新一（編）（1991）『南方熊楠コレクション　南方マンダラ』河出書房
西平直（2021）『井筒俊彦と二重の見』ぷねうま舎
小野純一（2023）『井筒俊彦　世界と対話する哲学』慶應義塾大学出版会
斎藤慶典（2018）『「東洋」哲学の根本問題　あるいは井筒俊彦』講談社
島田正路（1995）『古事記と言霊』言霊の会
竹村牧男（2021）『空海の言語哲学　『声字実相義』を読む』春秋社
田中公明（2012）『図説チベット密教』春秋社

参照資料

南方熊楠顕彰館（2006）「土宜法龍宛書簡（南方マンダラほか）」
https://www.minakata.org/facility/collections/minakatamandala/（2023 年 6 月 10 日アクセス）

（原稿受付　2023 年 10 月 26 日）